

## 18. 副甲状腺腫瘍のシンチグラム像

伊藤 信昭 向田 邦俊 中西 敏夫  
 佐々木正博 (広島大・放)  
 江崎 治夫 (同・二外)

過去 11 年間で、副甲状腺シンチグラフィおよび手術を施行した副甲状腺腫瘍は、女性 1 例、男性 4 例の 5 例であった。 $^{75}\text{Se}$  では 3 例中 1 例、 $^{201}\text{Tl}$  では 3 例中 2 例に病巣が陽性に描画された。 $^{201}\text{Tl}$  では 3 g の腫瘍でも陽性に描画されたが、 $^{75}\text{Se}$  では 3 g の腫瘍は描画されず、0.4 g の腫瘍では、いずれの核種においても描画されなかった。副甲状腺シンチグラフィで病巣が陽性に描画された症例は 5 例中 3 例であったが、病巣の描画部位と腫瘍の存在部位とは全例一致していた。

以上より、非侵襲的な検査法である副甲状腺シンチグラフィ、とくに  $^{201}\text{Tl}$  と  $^{99\text{m}}\text{Tc}$  との subtraction scintigraphy は、副甲状腺腫瘍の術前の局在診断法として有用であると考えられる。

19. 褐色細胞腫における  $^{131}\text{I}$ -MIBG シンチグラフィ

平木 祥夫 森本 節夫 上者 郁夫  
 林 英博 藤島 護 木本 真  
 橋本 啓二 青野 要 (岡山大・放)  
 大橋 輝久 入江 伸 大森 弘之  
 (同・泌)

褐色細胞腫の診断における  $^{131}\text{I}$ -MIBG シンチグラフィについて、自験 5 症例を対象として検討した。正常体内分布では、膀胱、肝、脾、唾液腺が高頻度に淡く描出され、また、心が描出されることもあった。褐色細胞腫の診断では、sensitivity, specificity とともに高率であった。副作用は全く認められなかった。

以上、非侵襲的で、容易に全身像が撮れるという点から、副腎内外の褐色細胞腫の検出やその転移巣、再発巣の検出、モニタリングに有用であると考えられた。

## 20. 副腎シンチグラムの臨床的検討

柳井 恭子 勝田 静知 (広島大・放)  
 中西 敏夫 佐々木正博 向田 邦俊  
 伊藤 信昭 (同・放部)

$^{131}\text{I}$ -アドステロールを用いた副腎シンチグラムを、副腎疾患 18 例 (アルドステロン症 8 例、クッシング症候群 8 例、ホルモン非産生性腫瘍 2 例) および、正常者 5 例、計 23 例について検討した。シンチスキャナーにて撮影したシンチフィルム上より、デンストメーターにて、副腎の uptake を測定し、カウント比 (C.R.=病側/健側) を求めた。正常者の C.R. は、 $1.176 \pm 0.146$  であった。腫瘍重量と C.R. は、正の相関を示したが、重量増加例、特に癌腫では、逆に低値であった。アルドステロン症では、デキサメサゾン負荷試験の併用により、C.R. は上昇し、診断が容易となった。また、腺腫と過形成の鑑別にも有用であった。クッシング症候群を呈する腺腫は C.R. が有意に高値であり、逆に癌腫では有意に低値であった。C.R. は、u-17-OHCS とは正の相関を示したが、u-17 KS、血中アルドステロン、およびコーチゾール値とは一定の傾向は認めなかった。

## 21. 陰嚢内病変における Scrotal Scintigraphy の有用性について——特に精索捻転と精索静脈瘤の診断について——

大塚 信昭 曾根 照喜 福永 仁夫  
 友光 達志 柳元 真一 村中 明  
 森田 陸司 (川崎医大・核)  
 西下 創一 (同・放)  
 斎藤 典章 天野 正道 田中 啓幹  
 (同・泌)

陰のうの腫脹、疼痛、不快感をきたす疾患のうち、特に救急的処置を必要とする捻転と、男性不妊の面から、精索静脈瘤の有無を早期に診断することは临床上重要である。われわれは昭和 55 年 2 月より昭和 59 年 5 月までに捻転と副睾丸炎あるいは他の原因による陰のうの腫脹をきたし、捻転との鑑別を必要としたもの 32 例、精索静脈瘤の疑い 30 例、その他陰のう内容疾患 12 例 (停留睾丸 4 例、睾丸腫瘍 4 例、外傷 4 例) につき Scrotal Scintigraphy を施行した。方法として Tc-99m-pertechnetate または Tc-99m-HSA を bolus 注入し、angiographic phase と static phase にて検討を行った。Scinti-